関東短期大学紀要　第 60 集　2018　pp.20~29

子どもと楽しく実践できる音楽遊び

―表現を広げるピアノ遊びの可能性―

吉　田　め　ぐ

はじめに

平成 29 年、新しい幼稚園教育要領と保育所保育指針が告示された(1)。音楽は領域＜表現＞に位置づけられ、全体目標には「幼児の感性や創造性を豊かにする様々な表現遊び」という言葉が述べられている(2)。幼児教育の中で、子どもの豊かな表現力や感性を養うための、音楽活動や音楽遊びを実践することが今後さらに求められる中、これまで当たり前に保育の現場で活用されてきたピアノについて、その必要性や活用方法が見直されている。

保育の現場でピアノが使われてきた歴史は長い。明治 30 年代、文部省音楽取締掛が総編集した『幼稚園唱歌集』の歌詞が改訂され簡単な伴奏がつけられたことで、幼児向けの唱歌集が出された(3)。先生がピアノを弾き、子どもがうたを歌う姿は、その時代から今も続いている。『実践しながら学ぶ子どもの音楽表現』では、ピアノがメロディ、リズム、ハーモニーを一人で同時に演奏できることや、音の高低と強弱の幅広さなどから、ピアノが歌唱伴奏として最も有効な楽器として活用されていることが述べられており(4)、簡易伴奏楽譜の出版や保育者養成におけるピアノ指導について研究が進んでいる。

これに対し、吉永は「保育室にピアノは必要か？」という問題を提起し、ピアノを用いないことによる多様な音楽表現の存在とその意義について述べている(5)。保育者が強い苦手意識や不安感を持っている場合、ピアノを使って子どもと音楽を楽しむことや、豊かな音楽表現に結びつける活動を行うことは難しいだろう。

保育におけるピアノの必要性について問われ始めた今、子どもの豊かな感性と表現を養うことができるような、ピアノを使った音楽遊び、そして歌唱伴奏としてだけではなく、楽しくピアノを活用できる方法が求められているのではないだろうか。

本研究では、現場で楽しく取り組むことができる、ピアノを中心とした 3 つの音楽遊びを実践する。保育者を目指す学生が、音楽遊びの知識や技能を習得し、音楽の面白さや楽しさを体感する課程でどのような学びを得るか、実践の成果を報告する。

1．実践の概要

(1) 対象と期間

対象は関東短期大学の 1 年生選択科目「アンサンブル」の履修者、21 名である。本実践は、平成 29 年度後期の授業全 15 回のうち 3 回を使い実践した。

(2) 題材

テーマは 3 つの「ピアノ遊び」である。ピアノや音楽の得意不得意に関係なく、現場で取り組むことができるような、ピアノを中心とした音楽遊びを実践する。

Ⅰ．ピアノでドレミ遊び

Ⅱ．絵本と一緒にピアノ遊び

Ⅲ．童謡がもっと楽しくなるピアノ遊び

題材から、どのような発展や応用が可能か、意見交換をしながら発表を行う。本実践における活動の重点は、子どもと楽しく遊ぶことが出来るような表現や活動の工夫を、学生たちがアイディアを出し合いながら考えることである。

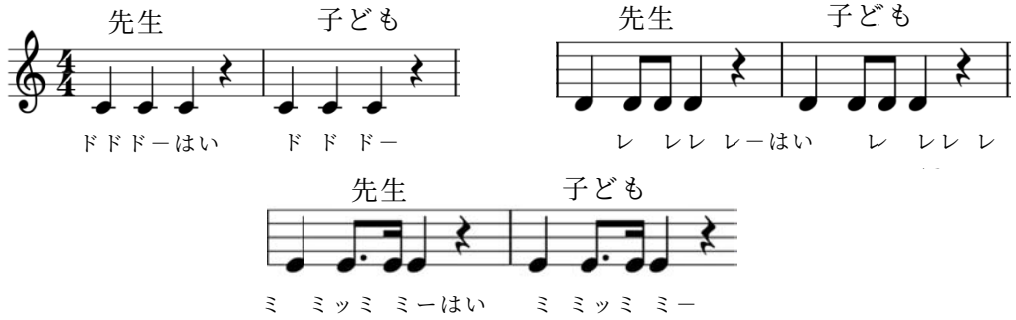
2．実践

(1) ピアノでドレミ遊び

＜実践内容＞

先生がたたいたリズムを子どもが模倣するような「まねっこリズム」を、ピアノのドレミにのせながら行う。楽譜も伴奏も不要であるため、どの場面でもすぐに取り組むことができる。

譜例 1 (模範)



＜ねらい＞

ピアノの音を聞き、子どもがドレミを声にしながら音の高低感やリズムを感じること（音感の育み）

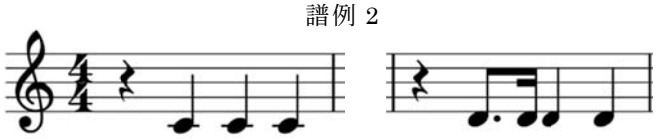
＜結果＞

学生から、6 つのアイディアが出された。

アイディア 1　休符を入れる場所を変化させる

「最初に休符を＜うん＞で入れるパターン」

譜例 2



アイディア 2

ドレミの順番ではなく、色々な音の組み合わせで行う。音域がわかるようゆっくり手などで高さを示しながら行う。

譜例 3

アイディア 3

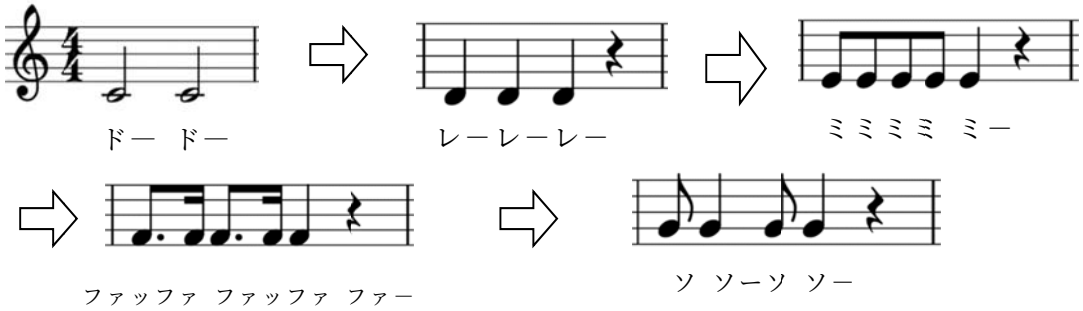
手をたたきながら、足踏みしながらなど、体に動きをつけ音とリズムを楽しみながら実践する。

アイディア 4

リズムの種類を段階的に変化させ増やしていく。

(2 分音符→4 分音符→8 分音符→付点のリズム→シンコペーションなど)

譜例　4



アイディア 5

音価やリズムを変化させ、それに合った動物の名前をつける。

譜例 5

＜考察＞

子どもの目線で、楽しく音感を育むためのアイディアが複数出された。指導者には、子どもの実態に合った活動の工夫や柔軟性が必要とされる。音の組み合わせやリズムを段階的に変化させていくなど、子どもの発達に合わせることの重要性について、実践を通し気づいていく学生の様子が見られた。音価やリズムを動物の様子に合わせ変化させるなどリトミックの要素に着目したアイディアも出され、子どもの音感や豊かな音楽表現を育む導入として活用できるだろう。

(2) 絵本と一緒にピアノ遊び

＜実践内容＞

ピアノの音や奏法を、絵本に取り入れる活動をする。効果音や効果音楽として、場面に適した音の入れ方を考える(6)。本実践では、絵本「だるまさんが」を使用する(7)。実践のはじめに、絵に合った音の入れ方を考える際のヒントとして、以下の4つのピアノ奏法を紹介した。

表1　ピアノ奏法

アルペジオ	和音の音を順番に弾く分散和音
スケール	起音をもとに一音ずつ上昇して起音まで下降する
クラスター	げんこつや腕で同時に音をならす
グリッサンド	鍵盤の上を滑らせるように演奏する

＜ねらい＞

絵や場面に合った音の入れ方や鳴らし方を考えながら多様な表現を考えること

＜結果＞

場面担当者を決め、そのシーンに適した奏法や音の入れ方を考え発表した。

『だるまさんが』

① だ　る　ま　さ　ん　が

アイディア1　ド(低)とソ(高)を順番に繰り返し鳴らす

アイディア2　ドレミファソラを言葉に合わせ順番に鳴らす

アイディア3　ここの部分は読むだけで何も音をつけない

アイディア4　毎回音の高さやバージョンを変える

② どてっ

アイディア1　ド(低)とミ(高)など単音を言葉に合わせて鳴らす

アイディア2　低い音をクラスターで鳴らす

③ ぷしゅーっ

アイディア 1　低音(高音)から高音(低音)へグリッサンド

アイディア 2　ドレミファソのスケールを鳴らす

アイディア 3　黒鍵を上から下へ 5、6 音弾く

④ ぷっ

アイディア 1　黒鍵を 1 音または 2 音ならす

アイディア 2　短くクラスターを鳴らす

アイディア 3　和音「ドミソ」を鳴らす

⑤ びろーん

アイディア 1　ペダル付で「ドミソド」をアルペジオで鳴らす

アイディア 2　「ドミソ」を連打して鳴らし続ける

アイディア 3　半音階を鳴らす

⑥ にこっ

アイディア 1　両手で同時にミソドの和音を鳴らす

アイディア 2　高い音域のソ(低)ド(高)を交互に鳴らし続ける

アイディア 3　終わりの感じを出すため少しゆっくりド(低)ド(高)と弾く

出されたアイディアから、ピアノを使った音の入れ方や楽器にはどのような特徴があるか話し合う時間をとった。学生から出された意見と、キーワードとして挙げられる内容をまとめた。

表 2　学生の意見とキーワード

意見	まとめ
場面によって弾く音の数を変えることで様子が変わる 一緒にいくつかの音を鳴らすと世界が広がる感じがする	単音と和音の違い・和声感
高い音から低い音まであるので音域が広い 高い音と低い音でイメージがぐっと変わる	音の高低の変化
弾く強さを変えることでわくわくする気持ちが膨らむ 同じ音でも強弱をつけることで表現の工夫につながる	強弱の変化
黒鍵と白鍵でイメージが変わる 半音階やメロディなど音程のついた効果音を入れられる	旋律楽器とリズム楽器の違い
ペダルを使うと臨場感が増す	響き(音色)の変化

＜考察＞

音の高低や強弱の活用、同時に複数の音を鳴らすなど、ピアノという楽器の特性

を活かしたアイディアが複数出された。楽譜がないからこそ、場面に合った音の工夫を自ら考え実践することは､想像力を豊かにし幅広い表現を生むだろう｡そして、自由に音を鳴らしながら絵本の場面に合った音選びを考える行為は、ピアノと遊びながら即興の面白さを体感するきっかけにつながるのではないだろうか。

実践を通し楽器にどのような特徴があるか考えたことで、表現の工夫には多様な可能性があることに学生は気づいた。まずは楽器と遊ぶことの楽しさや大切さを実感することが、豊かな音楽表現につながるのではないだろうか。

(3) 童謡がもっと楽しくなるピアノ遊び

＜実践内容＞

簡単な童謡に、変化をつけることでどのような表現が生まれるかを考える。本実践では「かえるのうた」を題材に、表現の工夫についてアイディアを出し合い発表する。ピアノ以外の楽器も取り入れ、豊かな音楽表現につながる実践を目指す。

＜ねらい＞

同じ曲を様々な表現で変化させることにより、歌う楽しさを広げること

＜結果＞

「かえるのうた」を変化させるとしたらどのような工夫が可能か、学生から３つのアイディアが出された。

アイディア１　テンポの変化

アイディア２　音の高低を変化

アイディア３　強弱の変化

テンポや音域、強弱に変化をつけることで、カエルのキャラクターが変化し、表現の幅が広がるだろうと考えた。

① テンポに変化をつけてみよう

アイディア１

速度を変える際に、テンポ感とイメージが一致するように名前をつける｡「あわてんぼうのカエルさん」「元気なカエルさん」「ゆったりカエルさん」など。

アイディア２

テンポに合わせて歩きながら歌う。早いテンポでは小走り、遅いテンポの時は一歩を大きくして歩く、など。

② 音の高低に変化をつけてみよう

アイディア１

音域の変化に合わせ、低い音は「お父さんガエル」真ん中の音は「お母さんガエル」高い音は「赤ちゃんガエル」など、名前をつけて歌い方にも変化を持たせる。

アイディア 2

テンポと音の高低の変化を、組み合わせて歌っても面白い活動になる。

③ 強弱に変化をつけてみよう

アイディア 1

音域の変化と一緒に組み合わせた方が、適した表現につなげる。

「お父さんガエル＋大きな声でしっかりうたう」「赤ちゃんガエル＋小さな声でやさしくうたう」など。

アイディア 2

強弱に合わせて、歌う姿勢を変えてみる。

強く歌う時→ジャンプしながら／普通に歌う時→立つ／弱く歌う時→座る　など。

これらの変化に、他の楽器を取り入れる場合どのような楽器選びや音の鳴らし方が可能か話し合いをした。

① テンポの変化

テンポが速い時…軽い音の楽器(トライアングル、カスタネットなど)

テンポが遅い時…音に重みのある楽器(大太鼓、木琴など)

② 音の高低の変化

高い音→可愛らしい音が出る楽器(トライアングル、すずなど)

低い音→音に重みのある楽器(大太鼓、木琴など)

③ 強弱の変化

同じ楽器でも、鳴らし方に変化をつける(優しく鳴らす、しっかり鳴らす、など)

＜考察＞

テンポや強弱など、音楽に必要な要素について変化や工夫をするアイディアが複数出された。ピアノを弾く時、当たり前のように決められた拍子やテンポ、強弱で演奏することが多いが、「テンポを変えてみたらどうなるだろう」「拍やリズムを変化させるとどのような曲調になるだろう」と自ら考えることが、豊かな表現につながる大切な行為なのではないだろうか。また、曲調の変化に合わせて使用する楽器や音の鳴らし方を考えたことで、より豊かな音楽表現の活動につなげることができた。「カエルのうた」で様々な表現の工夫や変化について実践したことで、他の童謡にも応用することができるだろう。

3．実践の成果

実践終了後、学生にアンケート調査を行った。質問項目は、本実践における知識

と技能の習得について、ピアノの楽しさを感じたかについて、そして実習や現場で本実践の内容を活用したいかについて、の 3 つである。以下が、回答結果である。

表 3　「ピアノ遊び」の知識と技能を習得したか

はい	79
だいたいできた	20
あまり十分ではない	1%
いいえ	0%

表 4　実践を通しピアノの楽しさを感じたか

はい	87
だいたいできた	13
あまり十分ではない	0%
いいえ	0%

表 5　現場で「ピアノ遊び」を実践したいか

はい	76
だいたいできた	22
あまり思わない	2%
いいえ	0%

アンケートの結果から、知識や技能が習得できなかった学生はいないことがわかった。また、音楽を楽しいと感じ、現場でも実践したいと感じた学生が多数いたという結果になった。ピアノの得意不得意に関係なく、誰でも取り組むことのできる内容設定､また子どもたちと一緒に楽しむことができるピアノ遊びであったことが、学生の満足度につながったのではないだろうか。

アンケートの最後に設けた、自由記述欄に書かれた感想の抜粋を以下に記載する。

表 6　自由記述より抜粋

苦手だったピアノに近づけた気がした
あまり好きではなかったが、はじめてピアノを楽しいと感じた
楽器の面白さを学び、色んな表現があると知ってわくわくした
絵本の楽しさをこんなに大きくする音楽はすごいと思った
ピアノ遊びで、音楽の楽しさを子どもたちに伝えたいと思った
ピアノが得意でないので不安だったけど、自分にも出来ると感じて自信につながった
自分で考えて子どもに合わせて工夫することで、たくさんの表現が生まれることを学んだ
先生も子どももみんなが笑顔になって楽しめる活動だと思った

自由記述欄に書かれた感想で多かったものを、以下 3 つの点についてまとめた。

① ピアノに対する意識変化について

ピアノに苦手意識のあった学生にとって、本実践がピアノを身近に感じるきっか

けなり、自分でもピアノを使った音楽遊びを実践できるかもしれない、という自信につながった。また、楽器の面白さや魅力を実感した学生も多かった。楽器が持つ幅広い表現の可能性を感じたことが、ピアノや音楽を楽しいと感じるきっかけにつながったのだろう。

② 楽器の面白さを体感することについて

実践を通し、正しい音とリズムで弾かなければいけないという固定観念やピアノへの強い苦手意識から、ピアノの面白さを体感し表現することの楽しさへと学生の様子は変化していった。楽器の特性を理解し、実際に音を鳴らしてみること、そして場面や状況に合った音楽表現の工夫をすることを学び、本実践が保育の現場で楽しい音楽活動をするための第一歩となったのではないだろうか。

③ 楽しむことの大切さについて

子どもの豊かな感性や表現を育むために、まずは指導者自身が「楽しむ心」を持っていなければならない。子どもの幅広い表現を引き出すために、現場での活動には様々な工夫や仕掛けをつくることが大切である。学生がアイディアを出し合い考えながら実践に取り組んだ時間は、音楽の楽しさと表現することの喜びを感じることが出来るきっかけとなったのではないか。

おわりに

これまで保育や教育現場で当たり前に使われてきたピアノについて、新しい視点からの活用法は、子どもと一緒に活動することを想像しながら取り組んだ学生のアイディアで、内容豊かで楽しいものへと変化していった。ピアノ遊びを通し、楽器の面白さや音楽の楽しさ、表現することの喜びを感じた体験は、子どもとの音楽活動をより豊かなものに変えていくきっかけにつながっていくだろう。

今後、今回の実践をもとに、様々なピアノ遊びを考案していくことが課題である。誰でもすぐに取り組むことができ、保育者も子どもも音楽の楽しさを感じることができる活動内容であることが重要である。また、表現領域の中で音楽以外の活動とも関連させた実践を考えることで、現場での音楽活動とピアノの可能性を広げていくことにつながるだろう。表現することの楽しさを学生自身が実感し、音楽を通し子どもの豊かな感性を育むことが出来るような保育者養成を目指し題材づくりを研究していきたい。

注：引用文献

(1) 文部科学省(2017)「幼稚園教育要領＜平成 29 年告示＞」厚生労働省(2017)「保育所保育指針＜平成 29 年告示＞」内閣府／文部科学省／厚生労働省(2017)「幼保連携型認定こども園教育・保育要領＜平成 29 年告示＞」

(2) 保育教諭養成課程研究会(2017)『幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究』p.19

(3) 齊藤基彦(2009)『伴奏付きの幼稚園唱歌』 http://www.geocities.jp/saitohmoto/hobby/music/yochien/yochien.html(参照 2017.11-10)

(4) 石井玲子(2009)『子どもの音楽表現』保育出版社 p.168-173

(5) 吉永早苗(2017) 『全国保育士養成セミナー要旨』より「養成校で育みたい保育者の音楽的な資質・能力』p.98

(6) 加藤照恵(2009)『子どもの音楽表現』より「効果音と効果音楽」保育出版社 p.173

(7) かがくいひろし(さく／え)(2007)『だるまさんが』ブロンズ新社

参考文献

・全国保育士養成セミナー(2017)『子ども・生きる・あそぶ―子どもの最善の利益を保障する保育者―』p.10

・ 岩崎光弘／馬淵明彦／箭川玲子／千葉和恵(編)(1990)『幼稚園、保育園のためのリトミック～年間カリキュラムとその実践～3 歳児用』より「即時反応 3 ドンすわれ／即時反応 4 たぬきさん／即時反応 5 あたま・はな・みみ／即時反応 6 くまさん／即時反応 7 あかちゃんとおじいさん」リトミック研究センターp.13-24

・大村典子(編)(1994)『大村典子ファミリーピアノ連弾集 1 わくわくチャレンジ』より「メリーさんの羊変身パフォーマンス！」音楽之友社 p.28-35

・大村典子(編)(1994)『大村典子ファミリーピアノ連弾集 2 うきうきチャレンジ』より「ぶんぶん変身パフォーマンス！」音楽之友社 p.28-35

・加山佳美(2017)『楽しいリトミック&リズム遊び』シンコーミュジックエンタテイメント p.6

・安部直美(2011)『保育のピアノ伴奏』日本文芸社 p.7

・株式会社ヤマハミュージックエンタテイメントホールディングス(編著) (2015)『ミッフィーのピアノ絵本①ピアノさん、あそぼ！』より「はじめに」ヤマハミュージックエンタテイメントホールディングス p.2